

# 公園での自由遊びにおける子どもの造形表現

宮 崎 百 合

Yuri MIYAZAKI : Children's Figurative Expression when Free Playing in the Park

鳥取短期大学研究紀要 第64号 抜刷

2011年12月

# 公園での自由遊びにおける子どもの造形表現

宮 崎 百 合

Yuri MIYAZAKI : Children's Figurative Expression when Free Playing in the Park

普段見過ごされがちな子どもの野外遊びで見受けられる砂や木・石などによる何気ない造形活動は現代美術のランドアートに位置づけられる価値を十分に持っているとはいえないか。大人の手を経ることなしに子ども自身で完結する活動の中にこそ子どもの美的感覚の本質を見出すことができるのではないだろうか。そのような視点から、本研究では公園における自由遊びを観察・記録してその芸術的な意味合いについて探った。

キーワード：ランドアート，幼児の造形表現，野外造形，遊び，自然物

## 1. はじめに

いまや美術の領域は多岐にわたり、完成された作品が展示されているばかりではなくなった。作家の行為そのものも含めて作品とみなしたり、欧米が発祥のアーティスト・イン・レジデンスに見られるような制作過程～作品展示～撤収までがすべて芸術としてとらえられることもはや珍しくはない。

さて、このような行為や状態の変化を含む造形美術の源流をたどると子どもの日常的な造形表現活動にその一端を垣間見ることができる。たとえば砂場遊びや基地づくりなどの活動は終われば跡形もなくなってしまう。しかしそれは自己の表現という点で芸術的な価値を持つといえるのではなからうか。

そこで本研究では、注目もされず保存されることもまずない子どもの自由遊びの中での造形表現について芸術的価値を再発見することを試みる。

## 2. 美術史にみる「行為」と「時間」を含んだ造形表現

さて、子どもの自由遊びの中での造形表現をみる前に、美術史における「行為」と「時間」を含んだ

造形表現について先行研究に基づきながら略史的に振り返っておこう。

### (1) ハプニングとイヴェント

アラン・カプロー (1929～2006) は 1959 年、ニューヨークのルーベン画廊で「6つの部分からなる18のハプニング」を発表した。これは画廊をビニールカーテンで6つに仕切って各部屋にタブローや廃品を展示し、同時にカプローの書いたスクリプトを6人の参加者が忠実に演じる中、鑑賞者は作品を観るだけでなくそうした行為や空間全体を体験していくというものだった。「ハプニング」と名付けられたこの芸術表現はカプローがポロック (1912～1956) のアクション・ペインティングに触発されたのがきっかけとなっている。つまり、絵画だけでなく「描く」行為そのものを取り入れたアクション・ペインティングがハプニングの出発点であった。カプローは観客を参加させることにより、行為の主体者として人間と物質、人間と環境の新しい関係を見出してみせた。

一方、「イヴェント」はハプニングに先駆けてアメリカで生まれた芸術の一動向であったが、J・ケージ (1912～1992) は音楽を「人間の行為のプロセスが生み出す音の環境である」という思想のもとに実

践していった。このイベントは劇的な身振りで自己表現されるハプニングより音や環境の偶然な出来事を凝視する姿勢を重んじる。

このような芸術における「行為の重視」は次第に音楽や演劇、さらにはテクノロジーなど異なる領域とからまりあい、美術館という枠からはみ出していく。

## (2) ランドアート

1960年代はこのように領域を超えて芸術が様々な方向を模索した時代であった。そのなかのひとつにランドアートがある。

ランドアートは広大な土地に人の手を加えて景観を作り直してその景観全てを芸術とみなすものであり、主にアメリカの現代美術家たちによって確立された。たとえばスミソン（1938～1973）の「螺旋状の防波堤」（1970）はアメリカ・ユタ州のグレート・ソルト湖に全長460mの巨大な岩の渦巻きを作ったものであるが、水位が下がった時しか全容を見ることができない。また、ハイザー（1941～）の「ダヴル・ネガティブ」（1969～1970）はアメリカ・ネヴァダ州に9×15×450mの大きな溝を掘ったものである。

スミソンは「大地を自然として受け入れる理由はない。私は屋外を美術館とと思っている。大地の下層は埋められた美術館のようなものだ<sup>1)</sup>」と発言した。これは大自然の中に自分自身の存在を示しながらも、刻一刻と変化していく自然によってそれが変化していくさまを見極めようとする冷徹な姿勢が感じられる。これらランドアートの概念にはそれまでの商業主義的な芸術に対するアンチテーゼが込められ、観賞者にももの本質と自己の存在理由を突きつけてくる。

## (3) 「概念」を読み取る芸術

このような状況が進んでくると、「もの」として作品を作るのではなく、ある状況に置かれた人間がそれに対してどのように反応するかという態度が重

視されるようになった。1960年代の末には「コンセプチュアル・アート（概念芸術）」と呼ばれる観念的な志向性が強まり、ものに極力手を加えず素材そのままを示す「もの派」と呼ばれる表現方法も試みられた。

## (4) インスタレーション

このような流れは作品が存在する時間と空間を含めて芸術としてとらえるインスタレーションとして1970年代に結実する。これは鑑賞者が「ものを見る」というより「その場と空間を体験する」といったほうがふさわしい。インスタレーションは基本的に会期が終わると撤去されて写真や映像としてしかその作品を見ることはできなくなってしまうが、もの・時間・空間の関係を重視するこのスタイルは単なる作品展示にとどまらない現代美術のジャンルとして確立し、現在も続いている。

## 3. アートとしてみる子どもの造形表現 —筆者の発想—

このように単なる作品展示ではなく、その作品を含む時間と空間全体を芸術とみなすランドアートやインスタレーションは現代美術の世界において定着しているが、一般的に芸術とみなされない子どもの造形活動のなかにその価値をみいだすことはできないだろうか。これが筆者の本稿における最大の研究目的である。

大人が鑑賞者を意識して制作するのと異なり、子どもが自由遊びの中で展開する造形活動は出来上がった後に第三者に「見て」と言ってもにできた喜びを共有することはあっても最初から鑑賞者を意識してものを作らない。

さらにその造形は始まりと終わりがあいまいであり、遊びの中で時々刻々と変化を遂げて活動が終わったら（あるいは活動の最中でさえ）造形物としての姿をとどめないことも珍しくない。まして野外で自然物によって制作されたものが長期的に保存さ

れることは現実的に不可能である。特に保育現場を離れた自由な活動については、それを観察して記録に取ることが非常に困難となる。

しかし、このような子どもの造形表現—特に野外において自然物と関わったうえで生まれてくるかたちは、ものとの原点的な関わりという点でこれまで示してきた概念芸術の源流といえるのではないだろうか。ランドアートはスケールこそ大きく洗練されてはいるが、それは子どもの頃誰でも夢中になった砂場遊びや基地づくりを思い起こさせる。自然に対する素朴な敬意を持ち、期間と場所が限定され、時間と共に風化していくという点での共通点も大きい。

ハイザーは「砂漠にいと、わたしは、一種の略奪されることもない平和で宗教的な空間をみいだすことができるが、それは芸術家が常に自分の作品に導入しようとしているものだ<sup>2)</sup>」と述べている。

野外で行われる子どもの造形表現はハイザーのこの考えを無意識的に行っているとはいえないだろうか。

#### 4. 観察研究—公園で行われる自発的な造形表現—

##### (1) 目的

子どもの造形表現の中でも野外で行われたものは自分を含めた周辺の空間全体を感覚的に取り入れたものであると考えられる。これは前章で述べたとおり、現代芸術でいうランドアートの概念に通じる。そこで野外における子どもの造形表現を観察してその芸術的な価値を探ることにした。

##### (2) 場所

本研究では野外で行われる子どもの造形表現の観察の場として市町村に点在する一般的な公園を選んだが、その理由は以下の2点である。

①保育現場ほど安全も制約も無いため、遊びに対する自由度と主体性の高い空間で自発的な造形活動が行われる。

②作られたものが比較的保存されやすく、また観察もしやすい。

特に今回の研究では3ヶ所の公園をピックアップし、2006年～2010年にわたって断続的に観察を行ったが、これらの公園に共通する点は以下の2点である。

①簡単な遊具を備えた、通称児童公園と呼ばれる小規模なものうち、日常的に子どもたちが自由に遊んでいる所である。

②保育所などが園外保育で利用せず、地域の行事がたまにある他は全く個人的な活動のみが展開されるため、作られた造形物が自発的な制作であることがはっきりしやすい。

次に、この3ヶ所の公園のそれぞれの特徴について述べる。

##### 公園A)

15年ほど前に作られた130世帯ほどの住宅地の中心に位置し、学区内では保育園児・小学生の数が多いためである。またこの住宅地の特徴として、保育園バスでまとまって降園し、公園の前で降車するため、夕方の時間帯（午後4時半頃）に公園で遊ぶ子どもたちの数が一番多い。この公園には1ブロックの広さで真砂土の地面にところどころ草が生えており、滑り台やシーソーなど一通りの遊具が設置さ



写真① 公園A

藤棚（右）、ベンチ（藤棚の左）、ブランコや滑り台などの遊具（奥）  
中央奥のブランコの左隣に真砂土の山が一時的に築かれた。

れているが、砂場は無い。バスケットゴールも設けられ、中高生が遊ぶ姿もよくみられる。街の中心地からは離れており、大きな川と田畑に囲まれた独立した住宅地のため住人以外が利用することはほとんどないが、広く開放的で遊具も充実しているの隣りの集落から車で遊びに来る親子もいる。

### 公園B)

10年ほど前に作られた住宅地の端にある50坪ほどの小さな空き地である。当初もっと広い別の場所が公園として予定されていたが、諸事情によりこの場所に移された経緯がある。「公園なのだから遊具を」ということで自治体が滑り台を購入したが、その直後に遊具だけでがをする事故が全国的に相次いだことを考慮した結果、現在でも遊具はこの滑り台ひとつのみである。この住宅地は80世帯ほどあり、小学生以下の子どもも20名ほどいるが、非常に狭く住宅と密接しているせいかこの公園で遊ぶ姿はほとんど見られない。



写真② 公園B  
滑り台(左)、ブロック塀(奥)、材木(右奥)、とんど祭の焼き火跡(中央)、一般住宅(左)

### 公園C)

40年以上昔からあり、遊具を含む設備も同等の年月を経たものが多い。市の中心街であり駅がすぐそばにあるにも関わらず静かな環境で、子どもたちが遊ぶ姿が比較的よくみられる。公園A・Bと異なり、保護者以外の大人の姿も時折みられる。1ブロックを使った公園は真砂土の広場・遊具中心の草地・



写真③ 公園C  
墓が作られた桜の木(右)、ベンチ(中央)、藤棚(中央奥)、砂場(左)、ブランコ(砂場の後ろ)、真砂土の広場(奥)

植木や花壇を中心とした広場の3つのスペースに分けられる。特徴的な遊具としては砂場があり、トイレが1ヶ所、自由に使える水道も2ヶ所併設されている。

## 5. 事例

### (事例1) 真砂土の山 (2006年夏、公園A)

#### 〈展開〉

ある日、砂場が無い公園の片隅に工事のための真砂土の山が積み上げられた。2m四方・高さ1mほどのものであったが、子どもたちはその日のうちにスコップやバケツを持ち寄っては掘る・バケツに入れる・プリン型で抜くなどの遊びに熱中した。数日経つと土山は素手で掘るのが難しいほど硬く縮まってきたが、子どもたちはスコップや木切れなどで山を削り、遊び続けた。

興味深いことに、この土山で一番頻繁に見られた遊びが「土を掘る・削る」という活動であった。硬くなった土山を「掘る・削る」という作業は労力を要するものであり、それだけで満足できる活動になりえたからではないだろうか。また、その硬さから手で掘ることは難しく、それがわかった子どもたちは家からスコップや洗剤のスプーンなどを持ってきた。しかし、それらの多くはプラスチックでできており、土山を掘るには困難な様子であった。このた

め、これら持参の道具の他に、公園に転がっていた木切れや石といったものを併用して掘り進める工夫が見られた。

砂場でも「掘る」ことはごく一般的にみられるが、ひたすら掘り続ける活動はあまり見られない。乾いた砂は掘っても崩れやすいし、掘り進めて湿った砂が顔を出した場合、そこから「おだんご作り」や「抜き型遊び」、「山作り」に移っていくことが多い。これは砂場のある公園Cでの観察で感じた印象である。

このほかこの土山ではミニカーを持ってきて走らせる・ボールを転がすなどの玩具を使った活動も見られた。また、この公園には水道が無かったが、わざわざ自宅からバケツやペットボトルで水を汲んできて「川」や「池」を作る試みも行われた。

しかし土山ができてから約3週間後、この土は公園の水たまりをならすために崩されて跡形もなくなってしまった。この後しばらくの期間、水たまりをならしたあとの土を掘る姿も見られたが、そこはもともとブランコやシーソーの足元に当たる部分であったため土遊びをしにくく、この遊びは次第におさまっていった。

#### 〈考察〉

この公園の地面の1か所にはもともと比較的軟らかい場所があり、砂場の無いこの公園での貴重な土遊びの場として人気があった。それだけにあの土山が出現したことは子どもたちにとって大きな喜びであったと思われる。その証拠に、土山があった期間は子どもたちが自宅から様々な道具を持参して土山と格闘し、公園がそれまでには見られない賑わいをみせていた。

子どもは遊びの中で土山の冷たい硬さと削り取った土の空気を含んだ柔らかい暖かさの違いを感触としてつかむ。また、土を掘って大きな石ころを掘り出した時ほとんど必ずその石を元の穴にはめてみる。石があった場所は雌型となってその形を忠実に写し取っている。子どもたちはこのようにしてものと空間の関係を確かめているのである。

土と穴の関係を端的に示した立体作品として、関根信夫（1942～）の「位相一大地」（1968）が思い起こされる。これは平らな地面に直径2m、高さ2.6mの円筒状の穴を掘り、その傍らに穴と相似形の円筒状に土を盛り上げて併置した作品であり、削り取られた空間が密度のある物体として圧倒的な存在感を放って迫ってくる。

子どもは土を削って穴を掘り、削り取った土で新たに山を作る。それは「そこに存在するもの」に自分が関わり、自己の表現として再構築することである。可塑性のある土は子どもたちにとってものと空間を認識するために非常に有効な素材であることを示す事例である。

#### 〈事例2〉砂場の杭を利用した造形表現（2009年冬、公園C、写真④⑤⑥ A⑥ B）

##### 〈展開〉

ある日、小学校低学年の子どもが2人、砂場で団子を作っていた。乾いた砂場を深く掘って湿った砂を取り出し、それで団子を作っては砂場を囲む杭に乗せて乾いた砂をかけた。黒く湿った団子と白く乾いた砂のコントラストが美しく並んでいくのを見て、一緒に遊んでいた数名の幼児たちが真似をして団子を作って杭に乗せ始めた。しばらくして小学生や幼児たちは砂場を出てほかの遊びに移ってしまったが、E子（3歳8ヶ月）は団子を作り続け、残っていたすべての杭の一つずつ乗せた。彼女がその砂場を去る時はそれを順番に、他人が作ったものも含めて足でつぶした後手で払いのけ、元の砂場の状態に戻した。

##### 〈考察〉

砂場の活動では砂団子や型抜きがよく行われるが、出来上がった作品を置いておく場所には砂の上より平らな台や葉っぱといった異質のものが選ばれやすい傾向がある。砂の造形は壊れやすいし、同質の砂では作品が映えないからであろう。この公園の砂場は木枠で囲まれ、等間隔で杭が打たれているが、

作った団子や拾った石ころを置く台としてその杭を利用する姿がよく見られた。これは一種の作品展示といえるが、子どもが自分で作った・あるいは見出したものを大切に取り扱いおうという気持ちが読み取れる。

この事例で注目したいのは、E子が小学生の行為を観察し、模倣し、すべての杭に同じように団子を作って乗せ、最後に砂を元の状態に戻すところまでまったく自発的に行ったことである。

せっかく作って展示したものを自らの手で壊すという行為は一見矛盾するよう感じられるが、子どもが自発的に始まりと終わりを決めてやり遂げたというところに自由遊びならではの大きな意味があるからである。すべての杭に同じように土団子を並べたという儀式的なやり方もこの年齢の幼児に特徴的な行為である。モンテッソーリはこのように「始めと終わりを自分で決めて自分なりの秩序をもってや



写真④ 木枠で囲まれた砂場（公園C）



写真⑤ 砂の団子を作って並べる小学生（奥）と砂遊びをするE子（左端）（公園C）



写真⑥ A 砂場の杭に並べられ、花を飾られた砂団子（公園C）



写真⑥ B 花を飾られた砂団子（写真⑥ A の一部）（公園C）

り遂げる」ことを「精神的エネルギーと肉体的エネルギーの統合」と言い表している。

### （事例3）木の家（2010年冬、公園B、写真⑦） 〈展開〉

ある日、公園の片隅にとんど祭りの薪の余りである長さ2mほどの材木が積んであった。遊びに来た2人の子どもたちは最初、足でつついたり手で少し持ち上げたりしていたが、そのうち平均台のように材木の上を歩きだした。それからしばらく別の遊びに移ったが、そのうちA子（6歳6ヶ月）は先ほどの材木にふたたび注意が向き、樹皮を手で剥き始めた。思いのほかきれいに長く剥けるが、成り行き上重なった材木を崩さなければ剥ききれない。そこで一番上の材木を持ち上げたところ、それを自分で持てたことの嬉しさから「材木移動」に興味に移った。A子は自分の身長より長い材木をバランスをとって運ぶのが楽しく、とうとう3mほど離れたブロック塀に20本ほどあった材木をすべて立てか

けてしまった。その形状は上部が重なって末広がりになっており、まるでテントのようであった。A子はしばらく自分の仕事の成果を満足そうに眺め、「家みたい」と言ってかがみこみ、材木の隙間からその空間に入り込んだ。そして著者に向かって「見て。家のなか」と言い、別の隙間から「ここ、出るところ」と言って這い出してきた。

最後に材木を元の位置に戻してこの活動は終わったが、A子は材木のうち2本を選び取って自宅へ持ち帰った。このうち1本はきれいな角材で、そこにあったすべての材木の中でこのようなまとまった形をしているのはこれだけだった。もう1本はどういう基準で選ばれたかは不明である。持ち帰られた材木は早速自宅の裏手にある小川で川をかきまわしたり川向うへ投げて拾いに行ったりする遊びに使われた。

この事例は片付けを促して元の位置に材木を戻す部分のみ著者が関わっているが、その他は自発的な活動である。

#### 〈考察〉

この活動は、最初に「手で触る」「足でその上を歩く」「皮を剥く」といった触感を楽しむ活動から始まる。これは新しく出会ったものに対する探索の行動である。次に「持ち上げてバランスをとりながら運ぶ」という全身的な活動に移り、さらに思考を



写真⑦ 積み上げられて置かれていた材木(公園B)活動が終わって元の位置に戻されたところ。

使った「見立て遊び」が展開し、最後にはそれを「選んで」「持ち帰り」「自分が考えた遊びの道具として利用する」という、自分のものとして取り込んで主体的に関わる活動に発展していく。

新しいものとの出会いは子どもにとって大きな刺激となり、「遊びなれた公園に見慣れないものが突如現れる」というところが事例(1)と共通するが、ものとの関わりが発展していくステップがよりはっきりと読み取れる点でこの事例は興味深い。

#### 〈事例4〉宝物を探す・隠す(2010年春、公園C、写真⑧)

##### 〈展開〉

M子(6歳11ヶ月)とA子(6歳7ヶ月)が砂場遊びをしている際、砂に混じった貝殻をいくつか発見した。そこでしばらく貝殻探しに熱中した後、ほかの友だちの誘いに応じて砂場を去ろうとした。これはその時大事な貝殻を安全な場所に隠そうとした事例である。

M子「この貝殻隠しておこう。K君たちに見つからないように」

M子は拾った貝殻を砂場に埋める。

A子「どこに埋めたかわからなくなっちゃうよ」

M子はほんの少し考え、長い木の棒を埋めた場所に突き立てる。

M子「これ目印。ここに埋めたっていうのがわかるように。宝物だから」

A子「秘密の場所の印。宝物の隠し場所」

A子は棒の周りに別の棒で丸く囲んだ印をつける。

A子「でもこれだと、K君にわかっちゃうよ」しかし、そのまま2人は友達と遊びに行ってしまう。

この展開の後15分も経たないうちに他の子どもによって目印の棒は引き抜かれたが、M子達が隠した宝物のことは知らなかったため、秘密が暴かれることはなかった。そして、M子もA子もその宝物の話に触れることは無く、宝物が再び掘り出される



ことはなかった。

〈考察〉

子どもたちが野外で花びらやジュースの蓋などの「いいもの」を見つけて拾い、家に持ち帰る「宝物集め」は今昔を問わずよくみられる遊びであり、事例（3）の材木を持ち帰ったこともこれと同様の性質を持っている。

しかし持ち帰った宝物がその後も継続して大事に扱われることはあまり無く、ポケットや自転車のかごに入ったままということもよくある。これは宝物を「探す」「見つける」といった行為が面白いのであって、それを保持することに子どもはあまり関心を持たない。

この事例は宝物を人に取られないよう隠して目印まで付けているが、隠した当人が宝物のことを忘れてしまう・あるいは覚えていても他の遊びに気持ちを切り替えてしまうという「今現在を生きる」子どもの特性を示している。



写真⑧ 砂場に作られた宝の隠し場所（公園C，2010年3月11日撮影）  
制作者：M子（6歳11ヶ月）・A子（6歳7ヶ月）

（5）墓（2009年夏～2010年春，公園C，写真⑨～⑭）

最後に挙げるこの事例は、半年以上にわたって続いた珍しいものである。

〈展開〉

1）カブトムシの墓（2009年夏）

ある日、K男（4歳・男）一本の桜の木の下を木切れと手で掘りながら、一緒に遊んでいた子どもたちに「あんな、ここにな、カブトムシが死んだ。ここ、カブトムシの墓だよ。見せたげる」と説明していた。

掘り返したところからカブトムシの死骸が出てくるとK男はそれを拾って手に乗せ、「いっぱい獲ったけどな。死んだから埋めた」と言った。ほかの子どもたちは死骸をのぞき込み、一緒に掘り返したり死骸をつついたりしてひとしきり鑑賞した後、三々五々ほかの遊びに移って行った。

カブトムシの墓はその後も幾度かK男によって掘り返され、その度に死骸が友達に披露された。

2）カリンのお供え（2009年秋）

カブトムシの墓から数か月経ったある日、同じ桜の木の根元にカリンが数個置かれていた。公園に遊びにきた子どもたちが鮮やかな黄色いカリンを見つけて手に取り「なんだろう？」「リンゴかな？」と言い合っていると、別の子どもが来て「お供えだよ」と教えた。「ふうん」と子どもたちは納得してカリンを元の場所に戻し、ほかの遊びに移って行った。

後日、公園でカリンの木を見つけた子どもたちは落ちていた実を拾って匂いをかいだり投げ合ったりした後、「お供え」と言って例の桜の木の根元にカリンを並べた。

3）小鳥の墓（2010年冬）

雪が溶けて冬の厳しさも緩んできた頃、再びK男（5歳）が例の桜の木を指差し、小鳥の死骸があると言った。カブトムシの時と違って今度は埋められておらず、ヒヨドリほどの大きさの小鳥が仰向けになって死んでいた。そしてその傍に藤の豆がいくつも突き刺してあった。藤の豆はすぐそばの藤棚から採られたものであったが、それはあたかも墓地に立てられた卒塔婆のようであった。秋に供えられたカリンは茶色く変色し、いくつかのかげらとなってまだ置かれていた。

#### 4) 小鳥の墓を巡る会話 (2010 年春)

小鳥の墓にはマンリョウの赤い実やツクシなど誰かしらの手によるお供えが絶えることが無かった。その中でも常にあるのは藤の豆の“卒塔婆”である。時には豆がすべて引き抜かれてばらばらになっていることもあったが、数日後にはある子どもが藤棚から新しく豆を取ってきて同じように刺している姿を見た。

ある日、公園の近所に住む母親が小さな子どもと一緒に砂場で遊んでいたところ、ちょうどほかの子どもと遊んでいたK男がやってきて「ここに小鳥が死んでいる」と言い出した。この親子はK男と自宅が近いのでお互いよく知っている。

このときの会話は次のようなものであった。

K男「ここにな、小鳥が死んどる」

母「へえ、そう。かわいそうになあ」

K男「なんで死んじゃったんだろう」

母「そうだなあ。ああ、車にぶつかったり、飛んで窓にぶつかって死んじゃう時もあるよ。猫もいるしねえ」

K男「どこで死んじゃった？」

母「さあ、どこだろうねえ」

K男「ここで死んじゃったの？」

母「さあ、ここかもしれないし、誰かが持ってきてお墓を作ったかもしれないし。どうだろうねえ」

K男「ピューッと飛んできて、バンッとぶつかって、ここにピューッと落ちて、バタッと死んじゃった」

(ふざけて振り付きで数回繰り返す。)

K男が手で死骸を触る。

M子(6歳11ヶ月)「鳥、手で触っちゃいけないんだよ」

母「そうだよ。死んでる鳥はね、触っちゃいけないんだよ」

K男「何で？」

M子「だって汚いもん」

母「死んだ鳥は触っちゃいけないよ…」

(言いながら自分の子どもの相手に戻る)

K男「なんで死んじゃった。あそこ(空を指す)からピューッと飛んできて、バンッとぶつかって、ここんとこに落ちて、バタッと死んじゃった！」

(再び振り付きで何度も叫ぶ)

ここにK男の兄Y男(7歳)が自転車に乗ってやって来たため、K男は一緒に行ってしまった。

#### 〈考察〉

この墓がある桜の木は公園の北寄り、砂場とトイレの中間点に単独で立っている。他にも単独で立っている木は何本かあるし、特にこの木の根元が掘りやすいわけでもない。また、墓は日常と離れた位置に作るものというイメージがあるが、この位置は皆が遊ぶ空間からさほど離れていない(写真③)。

この桜の下がいつから「墓」としての機能を持っていたかは不明であるが、少なくとも「カブトムシの墓」から半年以上は継続して「墓」の性質を持ち続けている。生き物が埋葬されたのが明らかなのは2009年8月のカブトムシと2010年2月頃の小鳥だが、その中間にあたる「秋のカリンの供物」については具体的に何かが埋葬されていたかどうかは不明であるし、カブトムシと同じ場所に小鳥が死んでいた理由もわからない。しかし何らかの理由でこの場所が墓としての機能を持ち続けていることだけは確かである。

著者は複数の子ども(具体的には兄弟を含まない4名の幼児)がかわるがわるお供えをしたり“墓荒らし”を行ったりしている光景をしばしば目撃したが、この中に「最初に小鳥を埋葬した者」は含まれていない。カブトムシの件から、小鳥をここに埋葬したのもK男だと推察していたが、彼はこの場所に小鳥が死んでいる理由を知らなかったため、実際は違っていたようである。最初に小鳥の墓を作った者が誰なのか、また小鳥はここで死んだのか、死んでからここに埋葬されたのか。これらは不明のままである。

また、この墓は幾度にもわたり子どもたちの手によって暴かれ、死骸を見たり触ったりする姿が見られた。このときの子どもたちの様子は次のようである。

- ・土を掘ったりつついたりする（素手または木切れ）
- ・死骸をつつく（素手または木切れ）
- ・死骸をつついた者に対し、非難する（「触っちゃだめ」「汚い」など）
- ・のぞき込む
- ・遠巻きにして眺める
- ・新たに木の実や花を供える
- ・埋めなおす

死骸は「汚い」「こわい」「気持ち悪い」といったマイナス要素を含んでいるため、触ることに対してもある種独特な好奇心をかき立てられるものであるらしい。

最初に素手ではなく木切れなどでつついて安全を確かめてから人差し指の先でおそろおそろ触り、次につまみあげ、さらにひっくり返して観察する。触る順番も、まず乾いていて接触面ができるだけ小さい部分（角の先や羽根の先端など）から始めてだんだん大胆になっていく。気をつけて見ると、接触面が小さく済むよう配慮しながらも感触が違う部分を



写真⑨ 小鳥の墓(公園C, 2010年3月3日撮影)  
2009年2月(発見時)  
桜の木(左上), 小鳥の死骸(左下),  
藤の豆(中央から右下), ツクシ(右寄り)



写真⑩ 小鳥の墓(公園C, 2010年3月14日撮影)  
マンリョウの実が新たに供えられ、藤の豆が引き抜かれて散らばっている。



写真⑪ 小鳥の墓(公園C, 2010年3月16日撮影)  
藤の豆が再び立てられている。



写真⑫ 小鳥の墓(公園C, 2010年4月15日撮影)  
自然に落ちた桜の花弁に埋もれている。



写真⑬ 小鳥の墓（公園C，2010年4月26日撮影）  
清掃で草が刈られた数日後、花卉が飾られている。



写真⑭ 小鳥の墓（公園C，2010年5月11日撮影）  
タイル付のコンクリート片と木片が置かれている。

複数触っているのがわかる。すなわちカブトムシならとがった角とつやつやの背中、小鳥ならふわふわの羽根と硬くて細い脚などである。カリンの場合は死骸のような不気味さはないのでそこまで慎重ではなく、手に持ってにおいをかいだりキャッチボールのように投げたりもする。子どもたちはこのように五感を使って新しいものに関わる姿勢を持っている。とくにこの事例は自由な環境下ならではの展開がみられた点で貴重である。保育現場で生き物を埋葬することはよくあるが、墓を掘り返したりむき出しになった死骸に触ったりすることは推奨されないからである。

## 6. まとめ

以上、公園を舞台とした野外における子どもの造形表現の5つの事例を見てきたが、これらについての共通点は以下のとおりである。

- ①始まりから終わりまで子どもの意思に基づいて活動しており大人の介入がないこと（事例3の片付のみ介入有）
  - ②野外にもともとあった自然物を主材として構成されていること
  - ③時間の経過とともに形と目的が変化していくこと
- 子どもが野外で造形活動を行う事例はイベントや学校授業などでもよく見受けられるが、それらは基本的に大人が設定した場所とテーマに基づいたものである。その点でこれらの事例はすべて子どもの自発的な意思と行動のみで活動が行われており、貴重な記録であるといえる。冒頭に述べたように、このような子どもの活動は全般を通して表出があいまいであり、後に残らないからである。

しかしこれは一般的に大人が作品としての意図を持って制作した芸術とはとらえられないものの、写真⑥や写真⑬にみられるような規則的なものの配置、鳥の墓の長期にわたる継続的な儀式的装飾は美的感覚を確かに持って作り上げられたものであり、ランドアートと呼ばれる時間・空間を含む芸術の概念と通じるものであると考える。

そういった意味で、子どもの自発的な造形表現は芸術として制作されたものに決して引けを取らず、むしろ観る者に媚びない強さと清々しさがあり、芸術的な価値は高いといえるのではないだろうか。

またこのような子どもの造形表現を芸術的な面からとらえる一方、三次元的空間のなかでの自己の存在を認識することにつながる大切な活動であることから発達心理学の視点での考察も不可欠である。

さらに文化的な面からみた場合、岡田夏木は現代の「児童文化」と呼ばれるもののほとんどが大人から子どもに向けて与えられていることを指摘し、

大人の手を経ることなしに子どもの世界の中で子どもたち自身が守り、育ててきたものを大切にする柳田國男の訴えを切実なものとして受け止めている。

いずれにしても、子どもの造形表現を見る際、「今ここにある存在」をありのまま見つめる姿勢を忘れてはならない。子ども本来の力を信じてその「声にならない声」に耳を澄まし、「見過ごされるもの」に目を向けることが「子どもの表現」を考える上での根本であると考えているからである。

#### 引用文献

- 1) 岡田隆彦「アース・ワーク」岡田隆彦『ミニマル・アート以後の現代美術』（週刊朝日百科 世

界の美術 79号), 朝日新聞社, 1979年9月, p 245

- 2) 前掲, p 244

#### 参考文献

- 1) 岡田隆彦『ミニマル・アート以後の現代美術』（週刊朝日百科 世界の美術 79号), 朝日新聞社, 1979年9月
- 2) 三木多門『現代日本の美術』（週刊朝日百科 世界の美術 139号), 朝日新聞社, 1980年11月
- 3) 相良敦子『ママ, ひとりでするのを手伝ってね! -モンテッソーリの幼児教育-』講談社, 1985
- 4) 岡本夏木『幼児期-子どもは世界をどうつかむか-』岩波新書, 2005